（序）田部家たたら製鉄業史の概要

相良英輔

一　戦国時代の田部家

現在田部家の由来について、比較的信憑性のあるものとして伝えられているものは、『国乃礎後編』に含まれている田部家の「来歴」である。『国乃礎』は、明治二十五年と同二十六年に刊行された『華族列伝　国乃礎』（三編、三冊）と明治二十七年と同二十八年に刊行された『国乃礎後編』（二編、二冊）からなっている。『国乃礎後編』では、明治二十七年十月から二十八年二月までに勅撰議員あるいは多額納税者議員であった者が収録されている。本書に記述されている各家の来歴は、主に爵位局と貴族院に提出されている履歴書の写しである。平成三年社団法人霞会館が本書を復刻したことにより広く知られるようになった。

田部家の明治三十一年から大正十五年までの『旧記』には貴族院議員田部長右衛門の来歴としてこの「国乃礎後編」が転載されている。山田盛太郎氏は、「田部家の遠祖が現住地＝吉田村に土着したのは文永年間（一二六四）で、同家の鉄山創業が寛正年間（一四六〇）、これは松江藩主松平氏入部のとき（寛永十五年、一六三八）よりも遥か以前のことに属する」と述べている（『日本農業生産力構造』一九六〇年）。これは『国乃礎後編』を援用したものである。以下、『国乃礎後編』にある田部長右衛門家の由来についてみていきたい。

『国乃礎後編』は、田部家の祖先について「出雲国屋裏郷ノ少領タリ、子孫世々出雲ニ居ル、其孫安西入道文永年中飯石郡吉田ノ邑ニ住シ、専ラ観音ヲ念シ、時人西亭殿ト称ス」とある。田部家明治三十一年「旧記」に登場する「田部家元祖　彦左衛門」は文明三年（一四七一）八一才で亡くなっている。『国乃礎後編』では、安西入道の系譜を引く「熊野ノ別当田部湛増ノ孫、田辺隼人正、鎌倉山内家周藤三良通資ニ仕ヘテ家長タリ」という。山内周藤通資の遠祖は「いわゆる西遷地頭で、正和五年（一三一六）相模国から備後地毘荘（じびのしょう）の地頭として移住した」[1]。惣領山内通資は、初め本拠を蔀山城（しとみやまじょう）（広島県庄原市高野町）に置いたが、のち甲山城（庄原市）に移り、蔀山城は弟通俊の系統に継承されることになった。この通俊流は多賀山氏を称する。「蔀山城の所在する地毘荘多賀村は、鉄の生産地として総領山内氏の重視した地域であったから、多賀山氏の一族内における地位は高かった」[2]。多賀山は「タカノヤマ」と呼んだともいわれ、近世の軍記物に「高野山」と書かれている。

さて、『国乃礎後編』によると、蔀山に居城した山内通資は鶴岡八幡宮を高野山に勧請し、田部隼人正はその奉行を勤めたとある。

ところで、『新修島根県史』年表篇では、永禄四年（一五六一）「田部通政、毛利方として出雲来島にて軍功あり」と記しており、その根拠として、同史料篇（古代・中世）に「田部家文書」を載せている[3]。この田部氏へ文書を発給した主体について、『新修島根県史』資料篇は周藤氏としているが、井上寛司氏は、山内周藤家の庶流多賀山氏とすべきであると主張している[4]。井上氏の主張に従うならば、「多賀山氏は山内周藤氏の庶家として、本宗家の領主制の一翼を担っていたと思われるが、山内氏が備後比婆郡地方のみならず、室町中期からは隣接の出雲仁多郡において、横田庄代官職や馬木郷内の所職等を取得するようになると、多賀山氏もそれに随って奥出雲方面に進出したらしい」[5]。そして永禄六年（一五六三）多賀山通定は、堀江左近丞、井上八郎右衛門尉に懸合郷（かけやごう）殿河内の内で、それぞれ三貫前の地を、田辺宗左衛門尉に懸合郷坂本村の内で一貫前の地を新給として宛て行っている[6]。

「多賀山氏の飯石郡内における支配地は、頓原町北部から三刀屋町南

部に及び、それらを支配する中心拠点として、掛合の日倉城が築かれた」[7]という。

岸田裕之氏は講演で多賀山氏に言及し、次のように述べている。[8]すなわち、多賀山氏は、部山城を居城とし、「大内氏と尼子氏の間で揺れ動いたいわゆる境目の国衆」で、その領域は現在の島根県横田町八川・掛合町・三刀屋町辺りまで及んでいた。そして享禄二年（一五二九）には、尼子氏に抵抗して居城を攻略された。木村信幸氏はこの説に同調し、多賀山氏の領主としての性格を「山内首藤氏の庶家筆頭」ではなく、独立性の強い「国衆」と位置づけている。

この永禄四年と同六年の史料に登場する田辺宗左衛門尉は、『国乃礎後編』の田部長右衛門の項に登場する「総左衛門通政」であることがわかる。田部家の明治三十一年「旧記」では、「四代　惣左衛門通政」と記されている。「五代　庄兵衛通国」については今のところ史料上確認できない。承応二年（一六五三）に没した「六代　中興與三兵衛通年」以降については、吉田町木ノ下の墓、円壽寺（浄土真宗）と桂昌庵（曹洞宗）の墓で確認することができる。

二　近世前期の田部家

田部家が現在の吉田町に町屋敷を購入したことのわかる最も古い史料は、寛文二年（一六六二）八月の「売申町家屋敷之事」であり、[9]八代・五左衛門の時である。その後も次々に町屋敷を購入し、元禄五年までに吉田町の町屋敷九軒を購入する。後々この屋敷には田部家の支配人や番頭格の従業員が住むことになる。現在の田部家本宅や土蔵群の西側、新町にも田部家の貸家があり、文政十三年の大火の時、田部家は一五軒の貸家を焼失したとある。[10]それはこの新町の貸家であろう。ここには手代たちが住んでいた。

さて、田部家が具体的にたたら経営を行っていたことを確認できる最も古い資料は、吉田町の木ノ下の田部家・金屋子神社に納められている棟札であり、一番古いものは、「寛文五年五月吉日　飯石郡吉田村」で、「本願　田邊五郎右衛門」とある。五郎右衛門は、八代・五左衛門の兄弟である。この時期、近世期連綿としてたたら操業を続けていた田部家はまだ兄弟親戚の中で突出した経済力を誇っていたわけではない。九代・安右衛門の時、「鉄山益々繁昌、金銀如山、米穀満庫」と田部家に伝えられる「系図」[11]には記されている。十代・長右衛門の時、田部家は兄弟親戚の中でも突出して確固とした地位を築いたと思われ、現在木ノ下にある金屋子神社の鳥居には、十代と十一代・祖右衛門の銘が刻まれている。[12]

田部家「系図」によると、六代・与左兵衛を「鉄山中興」と記しており、「元和年中（一六一五～一六二三）備後高野山から吉田村に帰り、鉄山を再興したという。『金屋子神信仰の基礎的研究』には、「田部家初の永代鈩（粟原鈩・正保三～貞享）」とあり、「創業の際、その守護神として金屋子神を勧進」と記してある。粟原は木ノ下の近辺の地名であり、田部家の近世前期の墓は木ノ下にあるから、うなずけないことはない。昭和十一年六月作成の「田部家史年表」によると、「吉田村粟原鈩打建、貞享四年迄四十二年間吹く」とある。四十二年前は正保三年（一六四六）であり、『金屋子神信仰の基礎的研究』はこれを引用したものであろう。「田部家史年表」の典拠は「田辺家譜」であるが、これは所在不明である。

田部家の貞享四年（一六八七）のころの一紙文書を見ると、七代・五右衛門は吉田村の大次米（おおじまい）鈩（近世期の掛合村、中野村に隣接し、大志度の隣）を操業していたが、五右衛門が亡くなって後、三年間はその子五右衛門（兄）と五郎右衛門が「寄合吹」（共同操業）す

ることで引き継いだ。この一連の文書の中で、「弐拾三年以前午年」より兄弟で三年間「寄合吹」したとあり、それは寛文六年（一六六六）であることがわかる。それ以前から父五右衛門は大次米鈩を操業していたことになる。粟原鈩操業時と近い年代で大次米鈩が操業されていたことになる。

田部家文書の寛文十三年（一六七三）四月十三日「永代売渡申鑪山鍛冶屋山之事」は、八代・綿屋五左衛門が「鑪山鍛冶屋山」を購入した時の文書である。これによると、「右之鑪山鍛冶屋山之分少も不残、并鑪道具かち屋道具共に永代売渡、則代包丁銀壱貫九百五拾目、外に包丁銀三貫目借シ方付渡」、「二口銀合四貫九百五拾目」で購入している。綿屋が購入したのは、鑪山（この当時はまだ「鉄山」という言葉は使っていない）と同時に鑪道具と鍛冶屋道具であり、その代銀が示され、当時の鈩経営について、関連価額が具体的に推測できるものである。その意味で貴重な史料である。

三　近世中期のたたら経営

「鉄山旧記」によると、元禄四年（一六九一）松江藩でも天秤吹きが始まり、鉄の大量生産体制が整いつつあった。しかしながら、鉄師たちは決して平坦な道を歩んではいない。安永九年（一七八〇）から天明七年（一七八七）までは、幕府により鉄座が設置され、山元における鉄生産者の鉄値段が下がって鉄師たちを苦しめた。

安永十年正月二十一日の史料によると、松江藩は鉄師頭取であった田部長右衛門に対して「大馬木村四郎左衛門差問」により、「田畑家家財御取上、鈩・鍛冶屋之分ハ御仕入之名目」と通達している。すなわち仁多郡大馬木村の四郎左衛門（絲原家）はこの時経営不振によって借金がかさみ、「書入」の形態で、借金返済まで藩に家督を取り上げられている。さらに、「大馬木村四郎左衛門鉄師頭取御免」になっている。絲原家にかわって頭取になったのは卜蔵屋甚兵衛である。田部長右衛門はそのまま頭取で、二人頭取体制である。

鉄座の設置による鉄師たちの経営不振は絲原家のみではなかった。天明五年（一七八五）十月二十六日、田部長右衛門も莫大な借金を抱えてしまい、養米に対する藩への「上納相滞候」ことになり、「田畑山林家財ともニ」残らず目録を差出し、「公物返上相済候迄」は目録に書いてある家督はすべて藩に取り上げられることになった。(13)

四　寛政十年の鉄師共借銀と割鉄生産への移行

享保十一年（一七二六）の松江藩「鉄方法式」は、鑪株を一〇カ所、鍛冶屋を三カ所半認めている。これは藩の鉄山政策が銑生産に重きを置いていたことを示している。近世前期に割鉄よりも銑の生産が多かったことは松江藩の特徴である。広島藩の場合、山県郡では近世前期から割鉄のみを大坂に出荷しているのである。

寛政十年、松江藩の鉄師一統七人は大坂の鉄問屋に莫大な借銀をするが、彼らはその返済銀を松江藩に一〇年賦、年利八朱の「御議定」で借用している。これを契機に藩も鉄生産に積極的に発言するようになった。その一例が銑出荷から割鉄出荷への推奨である。「鉄方御用留」には、寛政十一年、文化六年に、藩が割鉄生産を勧めている史料がある。こうして鉄師たちもしだいに割鉄出荷に重きをおくようになっていった。

はじめは鍛冶屋は三か所半しか認められていなかったため、鉄師達はすぐには割鉄増の推奨に対応できなかった。しかし松江藩も増鍛冶屋を認めるようになっていった。これに最も早く対応できたのが田部家であった。田部家の安政五年現在の鍛冶屋は、吉田町御鍛冶屋半軒、芦谷御鍛冶屋一軒（吉田村）、瀧谷御鍛冶屋半軒（松笠村）、中谷御鍛冶屋一

軒（松笠村）、江月谷御鍛冶屋半軒（朝原村）、杉谷御鍛冶屋半軒（曽木村）、恩谷御鍛冶屋半軒（広瀬藩）である。田部家の割鉄生産への即応が幕末の需要増大に対応でき、大きな利益を得ることができたのである。

五　幕末・維新期の田部家たたら経営

弘化三年（一八四六）、田部家のたたら経営は苦境に陥り、養米の代銀を期日までに納入できず、家督をすべて藩に引き上げられるという処分を受けている。実質は、藩から田部長右衛門に対し、田部家のたたら「支配」を命ずる形になっており、田部家の家督はすべて借銀に対する「書入」になっているとみなすことができる。

その後、文久二年（一八六二）以降、鉄価は急騰し、田部家はたたら経営において大きな利益をあげている。しかし、慶応二年以降、米価が鉄価を上まわる勢いで上昇し、賃金の重要部分をしめる米の高騰は生産コストをあげ、慶応三年には田部家のたたら経営も全体的にはついに赤字を計上することになる。

しかしながら、文政九年以降明治四年まで、菅谷鑪は一度も赤字になったことはない。さらに弓谷鑪、杉戸鑪の二か所は、安政三年以降明治四年までを見ると、慶応三年以外は黒字である。八重滝鑪も文久二年と慶応三年にわずかの赤字を出すが、それ以外黒字である。安政六年以降操業した八代谷鑪（櫻井家と共同操業）や頓原村の奥畑鑪などが多く赤字を出している。

六　明治期における田部家のたたら鍛冶経営

明治六年、田部家の鑪五か所の操業回数をみると、菅谷鑪がもっとも多く、ついで八重瀧鑪になっている。[14] 菅谷鑪は通年操業を続けていたことをうかがわせるが、杉戸鑪や弓谷鑪は年間二〇回前後の操業であり、この時期通年操業になっていなかったと思われる。通年操業できないのは、おそらく砂鉄ないし木炭のいずれかを入手できなかったものと推定される。これら鑪の支出の内訳比率をみると、だいたい労賃が四五％前後、砂鉄が三〇％前後、木炭が二〇％であり、これらが支出のほとんどを占める。

鑪五ヵ所の明治六～二〇年収支勘定を見ると、全体の合計操業回数は十八年以降急減している。松方デフレによる不況で鉄の価格は十四年以降下がっていき、十六年から収支は赤字になっている。しかし生産量は減少させておらず、数年後にようやく減少させている。需要に応じて臨機応変に生産を増減していないのである。支出の内訳をみると、労賃の比率が松方デフレ期間中は下がっており、砂鉄代より比率を下げている。鉄の価格が下がると同時に労賃を下げていったのである。

明治六年の田部家鍛冶屋八ヵ所の経営収支を見ると、鍛冶屋における支出の七〇％前後は地鉄で占める。労賃が一七～二六％であり、小炭は五～七％である。鍛冶屋吹数は鍛冶屋によって随分異なっており、地鉄の入手次第で吹数は違ってくるが、鑪場からの地鉄の入荷量が安定していなかったのかもしれない。純益をみると、松笠村の滝谷鍛冶屋が地鉄の購入量も多く、吹数も多いため、大きな利益を出している。全般的にみて、鍛冶屋の利益はたたらの利益よりもかなり小さかった。

鍛冶屋八ヵ所の明治六～二十年の合計収支を見ると、地鉄は支出の五二～六〇％、労賃は三〇～三七％、小炭は六～一二％である。純益をみると、やはり十四年以降急減している。しかし赤字にはなっていない。たたら場と違って鍛冶屋は規模が小さく、不況に素早く順応できたのであろう。

明治十六年以降の田部家のたたら鍛冶経営について、田部家は次のように既述している。多少長くなるが要約してみたい。[15]

明治十六年度までは鉄業も取り続いていたが、追々不景気になり、十八年になると、それが極度になり、坂井港の小石次郎助から鉄代の前金数万円を借金するに至った。到底回復の見込みも立たず、廃業のほか策はないほどに至ったが、幸いにして二十一年ころより少しずつ鉄が売れるようになり、小石からの借金もすべて返済し、休業せずして継続してきたが、洋鉄鋼輸入が増加してきたため、和鉄鋼類は次第に値段が下落していき、同時に売れなくなっていった。ところが三十年ころより呉海軍工廠より雲伯鉄業組合に対し、大量の注文が来るようになり、爾来同工廠を唯一の得意先とするようになった。しかし、四十年度からまたまた不景気に陥り、海軍工廠は和鉄について「燐分多量ノ口実」によって半額もの値引きを要請してきたため、これを受けざるを得なくなり、泣く泣く「捨売致候様ノ成行」になった。従って「到底拾数ケ所ノ鑪鍛ヲ営」むことは不可能となり、「断然縮少ノ方針ヲ立テ」、四十年度より規模の縮小を図り、菅谷鑪、大吉鑪と芦谷、杉谷の両鍛冶屋だけを維持し、中谷鑪、瀧谷鍛冶屋、八重瀧鑪、堂ケ谷鑪、恩谷鍛冶屋、立石鑪、和恵鍛冶屋の七ケ所を廃業することになった。その後、杉戸鑪、町鍛冶屋も続いて休業し、小規模営業にした。

七　大正時代のたたらと製炭業

大正期になってもたたら製鉄は苦難の道を歩まざるをえなかった。同じ「明治三拾壱年　旧記」（大正十五年まで記述）は、大正期の田部家たたら経営とその全面的廃業までを次のように既述している。引き続き要約してみたい。

大正四年一月より鑪鍛共半稼に減じ、召抱えていた労働者も過半を解雇した。ところが、欧州戦乱（第一次大戦）のため、洋鉄鋼類の輸入ができなくなり、いっぽうで同盟国より武器その他多数の注文が来るようになった。こうしてにわかに鉄鋼の需要が増加し、従って諸工廠の注文が続々来るようになり、値段も順次騰貴していき、大正四年度までの在庫品約一万二〇〇〇駄のうち、九五〇〇駄は安い値段ではあったが五年度に売り尽くした。まさに稀有のことであった。さらに大正六年度には、枝光製鉄所から雲伯組合に対し、鉄鋼、銑鉄を合わせて二八〇〇屯ずつ三年継続の注文を受けた。さらに東京造兵廠と大森製鋼所より一五六〇屯の注文を受けた。東京造兵廠は数十年来の得意先であったので、一五〇屯だけを引き受け、大森製鋼所の注文はお断りした。呉工廠からも生産年額を聞いてきたが、生産量のすべてが契約済みになっており、余分の製品がないため断らざるをえなかった。生産を半分にする計画を一年延期しておけば、この好機に際し、大きな利益を得ることができたのにと、いまさらながらに惜しんだ。鉄穴は半減し、労働者は半数を解雇した今日にありては致し方もないことである。

大正六年の立ち上がりは、三〇余年間において稀有の大雪で、都賀加のごときは電柱も雪に隠れたほどに雪が積もった。従って鉄穴の不作は筆舌に尽くしがたいものがあった。大吉鑪は幸いに七～八〇〇〇駄を所有していたが、菅谷鑪は伯耆の浜粉鉄五〇〇〇駄を買い入れ、一時補充するありさまで、営業上の困難は想像の限りでなかった。しかしながら大正五年以降、欧州戦乱に伴い、価格はしだいに暴騰していき、鉄業者は今日まで稀にみる利益を獲得した。

大正五～七年の田部家事業構成をみると、財務部や営業部などの部署がある。財務部は、山方、畜産方、調度方、および計算方からなり、営業部は、ヶ所の「元締」で、鉄製品の販売等損益をとりまとめた部署である。[16] 営業部は小作米の販売、鉄の販売を含むものと思われる。大阪出店は鉄の大阪での販売を担っていた。八重瀧福田の製炭所は、明治四十年八重瀧鑪を閉鎖して以降、製炭事業を始めたものである。インフレの時期ではあるが、田部家の利益合計をみると、五年一二万五八五四円の利益であるのに対し、七年には二三万七一八四円と五年のほぼ二倍の利益を得ている。田部家も「既往稀ニ見ル利益ヲ獲得セリ」と記している。

大正七年十二月時点での田部家の銀行諸預入金三八万八九三七円を銀行ごとにみると、東京第三銀行や大坂の銀行など大都市の銀行を中心に

して預けているが、松江銀行への預け入れも大きい。これらの預金はその後多少は債券や株式へ移動されたであろう。

この時期の好景気は、一時的なものであった。しかもたたら経営の規模を、明治四十年、大正四年と二度にわたり縮小した直後の需要拡大であったため、注文に応じきれなかった。鉄、鋼の製造高をみると、大正五年鉄一九八二駄、鋼一六八三駄、大坂為登銑八二四駄であるが、同七年をみると、鉄一三〇七駄、鋼一一三一駄、大坂為登銑一三五四駄であり、大坂為登銑のみが製造高を増やしているのである。

販売先は、東京、大坂、松江、山元に分けられるが、呉海軍工廠、福岡製鉄所、東京鋼材株式会社、日本高速度鋼株式会社、京都川那部坩堝鋳鋼所、東京日本特種鋼合資会社が主なものである。

その後、大正九年以降戦後不況に見舞われ、たたら製鉄業も決定的な打撃を受けた。「明治三拾壱年　旧記」の大正十三年二月「製炭事業開始ニ就テ」の項では、たたら製鉄業は鉄鉱石による製鉄業に取って代られると冷静に時代の流れを見通している。すなわち「是迄幾度かの浮沈ニ堪へ今日迄継続致来候も世の進歩ニ伴ひ、製鉄術之進歩著しく、従来行ひ来候姑息の方法等ニテハ如何ともする能はす」という。さらに「加之最近治水問題」が日増しにやかましくなり、「之レが為め原料たる砂鉄の採取容易ならさる事ニ相成、殊ニ欧州戦乱の打撃」、すなわち軍縮の流れの中で各国とも軍艦を制限し、造船関連の需要も無くなっていった。一方で木炭などの価格は騰貴し、収支償わなくなった。ここに至り、やむを得ず大正十年度より鑪鍛冶屋の事業を半減し、「補足事業として普通木炭の製造を試ミ、世の変遷を観望せしも、鉄業界の前途ハ倍ニ暗黒にして、到底近き将来ニ曙光だも認むへき模様も見得さるに拠り、遺憾なから大正拾弐年度末」をもって「現在之工場、菅谷鑪、大吉鑪、杉谷鍛冶屋、芦谷鍛冶屋之四ヶ所ハ断然廃業して木炭専業に従事ス」ることになった。そして「右鉄業より木炭に変遷せる状態を記録して後年の参考に供す」と結んでいる。「後年の参考に供す」と結んでいるところが、時代の流れを見ながら事業展開の展望を見出そうとしていて、新しい事業への意欲を感じることができる。

注

(1)『掛合町誌』一二三頁。

(2) 同右。

(3) この文書は現在田部家でも所在不明になっている。

(4) 筆者の質問に対し、井上氏に直接ご教示いただいた。その根拠として、田部氏が多賀山氏の家臣であったことは、『出雲尼子史料集』、No.994におさめてある「多賀山通読同家系図案」に田辺四郎左衛門尉・田辺五郎兵衛などとして見え、宗左衛門もその系譜に連なる人物であったと推定できるから、というものである。

(5)『掛合町誌』一二四頁。

(6)『新修島根県史』史料篇（古代・中世）四六六頁。『掛合町誌』一二六頁でも、田部家文書「永禄六年六月二十八日多賀山通定宛行状」をもってこれに言及している。

(7)『掛合町誌』一二六―一二七頁。

(8) 木村信幸氏「備後国多賀山氏の基本的性格」（『芸備地方史研究』二四八号所収）で、岸田裕之氏の講演内容を紹介している。

(9) 田部家文書・前蔵27

(10) 田部家文書「文化五年　鉄山殿合一巻」に綴じられた「諸御用附込」に記されている。

(11) この「系図」は昭和十六年一月一日、二十三代朋之氏によって浄書されたものであるが、朋之氏によってこれは「田部家史編纂ノ業績ノ一部ナリ」と記されている。七代・五右衛門以降は、一紙文書によって確認することができる。この

「田部家史編纂」については昭和十五年五月十九日まで記された「日誌」に記されているが、詳しくは本書所収の中山富広氏〈田部家史編纂と「鉄業営業状態概略」〉を参照いただきたい。

(12) この時、「田辺」を「田部」と改め、屋号を前綿屋とし、兄弟の庄右衛門が上綿屋と号するようになる（上綿屋は享保十四年、一代で終わる）。

(13) 天明四～五年「鉄方御用留」

(14) 相良英輔「田部家の由来とたたら製鉄業の展開」（相良英輔編著『松江藩鉄師頭取　田部家の研究』平成二十一年三月、島根大学発行）参照。

(15) 田部家文書「明治三拾壱年　旧記」（大正十五年まで記述）。

(16) 中山富広〈在来産業たたら製鉄の衰退とその歴史的意義―出雲・田部家「鉄業創始以来営業状態概略」をてがかりとして―〉（勝部眞人編『近代東アジア社会における外来と在来』二〇一一年、清文堂・所収）。